

郷土資料編 冊紙四十五号三頁二十行(栗橋地区の二)

第三十二回史跡めぐり(栗橋地区)

越谷市郷土研究会

五霞村資料

岩井町御前新田 今井隆助造

◎ 川手指貝塚

権現堂川に連なる水田のつまる所の畑地七十米平方に、魏・力半哈の貝殻散在。縄文式土器、石斧等出土す。(五霞中学蔵)

又、昭和四年帯大秀古学部調査結果あり。衣土下 二米 稻骨、石鏡、土器包含

◎ 冬木貝塚 (冬木知久發見)

権現堂川跡東方畑地 二十米平方
淡水産蛸等・縄文式土器出土(五霞中学蔵)

◎ 土治貝塚

利根川の入江水田に接する畑地 湧水産カキシオフキ、アサリ、蛤・縄文式土器、石器・弥生式土器。

◎ 古墳群

川手指「四八塚」と称されたが、今一、二墓を残すのみ。

◎ 伊勢塚

(飛田典男氏宅裏)は、前方後田・長至六十米。後田至四十米。二重土盛。高七米。西向、一帯瓦葺の腰に直刀、須恵器出土。前方部の前面に陪塚と認めしき經十二米・高三米の「筑神塚」あり。

この「伊勢塚」の南方五十米の所に石室をむつた古墳、又西北方數十米を距てて山口徳丸廟の古墳等が群をなして有った。これらの古墳群の位置は東北に利根川を控え、北前に水田をめぐらした地帯である。

◎ 穴薬師古墳 (川妻 藤沼喜一氏所有林)

利根川の南方一軒・前面に水田を控えた台地に有る。蓋らしい岩石は入口の川径の側にあり、石室は煉瓦型にした石で壁が造られ、高さ三・二米・内方二米の円球状をなしている羨道もあり、入口の經九十程の楕円穴のもの。奥に金銅の薬師像を安置してあつたといふ穴がある。

土盛は東西二十米、南北二三米、謝れた姿で円墳を形造っている。

◎ 痕泉塚 (元栗橋、板間七八九松本奥蔵所有)

前方後円、長径五十丈、高六六米。(出土の土器は五穀中学蔵) 頂上に痕泉神が祭られている。文永五年の板碑もある。頂上に柵を讀んだ句碑が横わっている。

◎ 怪塚 (川福田、土塔、熊重寺寺)

墓底部二三米、高六四、八、八、建立当初は高十米、面積八畝あったと有したといわれている。浄土宗史跡。正應元年(一一八九) 岩井に高寺建立、藤田派の祖唱阿の次河が土塔派を興し、その秘伝巻物を埋めるため、関東、東北の信者が一握りづつの土を持って来て集めたという。

◎ 東昌寺由来記

古来「牟世嶽」として善徳の學い東昌寺の地蔵尊の台石に「下河辺庄松井郷岡宿山王山」と刻み込まれている所からすると、五謗村東南部は岡宿の一部であった。岡宿の領主は下河辺莊司より、

小山氏に、そして小山氏から佐竹氏に渡った。

佐竹義隆は承享の乱に鎌倉公方にぞむいたが、梁田滿助がとりなして事なきを得たので、その謝礼に武州駒西と関宿近郷とヶ村を梁田滿助に譲った。そこで梁田氏は水滸城から関宿城に移った。

滿助は主君 古河公方のために東昌寺を建てた。二代目の公方政氏は明應三甲子(實)歳六月二日、龍馬頭源朝臣宗印をもつて、父政氏のために東昌寺へ 野渡井下宮を野進した。

文明八年の焼鐘は鐘の音が聞かれているが現存する。文明九年(一四七七)十月、上杉定正が関宿に攻めよせたが撃退。明應二年(一四九三)上杉方の江戸氏、豊島氏來攻し八日岡合戦。弘治二年十二月以来、公方義氏が関宿城に在り、梁田氏、古河に在城、蕨島、結城の地侍が蕨城參陣。

元正二年四月、北条氏政が梁田領村を侵し、川山城を圍み、畑十二月、関宿城に向ったが、輝虎義重後詰を以て落せず。上杉謙信の稱越後、公方義氏も保身のため関宿開城。

天正十七年謙社交渉が北条氏の違約から破れ、天正十八年豊臣秀吉は、山田原城、関宿城等を攻

囲んだ。東昌寺は閉塞攻めの本陣にあつた、九
の喬札が掲げられた。

(岩波文庫利根川図説所載) 現存

糸 刀

下総国東昌寺(同寺蔵)

- 一、当寺門前百姓等急度可_レ遷住_二争_一 在?
- 一、寺家門前不可_レ牌取 原田島立毛不可_レ前取_二争_一
- 一、对寺中門前輩 狼藉非分の族 於有_レ之者 可_レ為_二一錢切_一事

右者放逐犯之輩者 忍可_レ致_二刈_一嚴科_二者_一也

天正十八年六月

秀吉 朱印

右の糸文によれば門前百姓は戦火を避けて逃げていたのを呼び戻させた。そして東昌寺は本陣であるが、寺門前には兵を置かず、兵に新田などはさせない。又狼藉者は丸坊主にして棄入扱りにするといふのである。

「一錢切」とは赤髪剃りの意で、一毛落んでも首を切るといふのではない。当所の末座の料金は一錢だった。

天正二年以後十七年固 北条氏政・氏直の傘下となつていた関宿城も落城して、松平康元が入城して領主となつた。他に寺室として、東照神君槍幕及馬廻掛巻を蔵す。

以 上